

森 正人・稲葉継陽編

## 『細川家の歴史資料と書籍』

——永青文庫資料論——

吉川弘文館 二〇一三・三刊  
A5 二四八頁 一〇〇〇〇円

公益財団法人永青文庫が所蔵する肥後細川家伝来の史資料は、一九六四年以来その大半が熊本大学附属図書館に寄託され、教育・研究のため利用されてきた。寄託先である熊本大学では、ここ数十年にわたり、国文学・歴史学など諸学の協業による拠点形成研究が組織されてこれら史資料群の重点的研究がおこなわれ、二〇〇九年には同大文学部に附属永青文庫研究センターが設置された。

同センターでは細川家史資料総目録の作成を目的のひとつとして、現在も事業は継続中である。二〇一三年二月、文化審議会によって、史資料群のうち中世文書を中心とした古文書二百六十六通を「細川家文書」として国指定重要文化財とするよう答申がなされ、六月に正式に指定を受けたことは記憶にあたらしい。これも同センターの研究が大きく実をむすんだものにはかなるまい。

それら貴重な史資料を写真に釈文を付して世の中に提供する『永青文庫叢書』（吉川弘文館）も刊行が進んでおり、細川家史資料群が身近になったと喜んでいる。いっぽう本書『細川家の歴史資料と書籍』は、同センターの研究に携わった熊本大学の教員を中

心とした研究者による論文集である。編者の一人稲葉氏による史資料群の解説「序説 熊本大学寄託永青文庫細川家史資料の構成と歴史的位置」以下、次の六篇が収録されている。

山田貴司「和泉上守護細川家ゆかりの文化財と肥後細川家の系譜認識」／稲葉継陽「細川家伝来の織田信長発給文書―細川藤孝と明智光秀」／松崎範子「十九世紀の宿場町を拠点とする地域運営システム―熊本藩の藩庁文書、「覚帳」・「町在」をもとに」／森正人「永青文庫熊本大学寄託和漢書の蔵書構成」／徳岡涼「細川幽斎の蔵書形成について」／山田尚子「細川重賢の蔵書と学問―漢文資料をめぐって」

このうち森論文では、明治に入ってから細川家や熊本大学において作成された複数の資料目録と、現在伝来している史資料群の関係把握を起点に、近世から近代に至る史資料群がいかに管理され、伝来されてきたのか、複雑な関係とその経緯が解きほぐされる。

山田貴司論文では、史資料群に含まれる和泉上守護細川家の文書・文化財の伝来をたどることにより、細川家が自らの家をいかに認識しようとしたのかが説かれる。稲葉論文では、特定の家に伝来した織田信長文書の数としては最大を誇る細川藤孝（幽斎）宛の信長文書を分析することにより、信長と藤孝・明智光秀の関係を探るほか、信長の権力構造にまで言及がなされている。松崎論文では、近世の藩庁文書に含まれる「覚帳」などの分析をもとに、熊本藩の地方行政の仕組みを具体的に明らかにしている。

徳岡論文・山田尚子論文では、細川家の蔵書のなかでも際だつ

た特色を示す幽齋および重賢の蔵書について、その奥書や書き込みなどを丹念に調べあげ、歴代藩主のなかでも文人としてとくに著名な二人の当主の文化的活動に光をあてている。

このように細川家の史資料群は、山田貴司・稲葉両氏が言及した中世以来の文書をはじめとして藩主の家に伝来したいわゆる「藩侯の文書」のみならず、松崎氏が取り上げた「藩庁の文書」にも研究に値すべき多くの史料が存し、また、徳岡・山田尚子両氏が明らかにしたような典籍群にも豊かな研究資源が眠っている。

大名家史資料群を史料群としてとらえる史料学的研究は各所で盛んにおこなわれているが、細川家のそれは質量ともにすぐれた規模を誇ることもあり、本書にまとめられた成果が他の同様の研究におよぼす影響や刺激ははかりしれない。永青文庫研究センターの事業はまだ道半ばにある。センターの存続はもちろん、本書にまとめられた研究を踏まえ、さらに研究が進展してゆくこと、これら史資料群がこれまで以上に教育・研究に活用されてゆくことを期待したい。

(金子 拓)